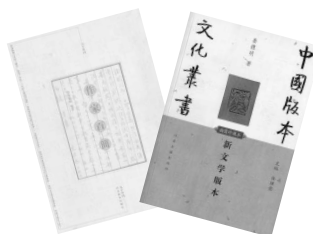


中国のほんの話 (47)

一冊の本の行方 ～ 愛書家・姜徳明

蔭山 達弥



長年、報道関係の仕事に携わり、文芸欄の編集を担当した姜徳明が、手元に保存しておいた作家からの書簡百通を、そのままカラーで写真製版印刷した『作家百簡』（河北教育出版社、2003）は、中国の現代文学を研究するものにとって貴重な資料であると同時に、それぞれの作家の筆跡から、その人となりや手紙が書かれた当時の「空気」を垣間見ることができる。

『作家百簡』に収められている書簡は、郭沫若や葉聖陶を除いて、ほとんどが「文化大革命」以降の1970年代後半から80年代のものである。姜徳明は『作家百簡』の序でこう述べている。

「報道関係の仕事に40数年つき、30年間文芸欄の編集を担当した。仕事の中で文壇と交流が多くあり、多くの先生や友人と知り合った。その頃お互いに連絡する手段は、主に手紙を通じてのやりとりである。その間、先輩作家の傑出した文章をうらやみ、手紙の中で、つい漏らした話や故事が多く述べられているものは、ついでに保存しておいたが、不幸にして文化大革命中にすべて一朝にして壊滅した。その中には阿英、唐弢、趙家璧先生の手紙が比較的多く、明らかに私が先生方を組織して執筆するコラムと関わりがあり、普段私も先生方に新文学の版本に関する知識の教えを乞うことが楽しみであった。当時だめにされた手紙には巴金、豊子愷、呉晗などの先生方からの個別の手紙もあった。一通一通が、今でも悔やみきれない。」

姜徳明は優れた編集者であると共に、稀代の書物収集家としても有名である。収集家としての彼の真骨頂というべき著作が、中国版本文化叢書の一冊『新文学版本』（江蘇古籍出版社、2002）である。最近では日本でも駅前や幹線道路沿いにある大型チェーン店の進出により、若い女性が古書店に入るのも珍しくなくなってきたが、姜徳明にとって古書の屋台を見て回ることは日常の習慣であった。同書『署名本の趣味（その1）』の中で、彼は次のように書いている。

「古本の屋台で古本を選んでいる時、本の上に作者の署名が有るか無いかで、買うか買わないかを決めることは稀である。私が収集してい

る署名入りの本は皆無意識のうちに手に入れたもので、帰宅後灯の下で気付いたものさえある。当然のことながら署名で買ったものも何種類もある。1980年、私は四川中路の古書店で作家葉聖陶先生が署名した散文集『西川集』を購入し、そのことを手紙に書いて葉先生に知らせた。葉先生は2月10日の返信の中でわざわざ署名入りの本の価値について指摘し、まさに我が意を得た。葉先生は次のように言っている。‘あなたが本人の署名入りの本を手に入れられたことは、とても面白い。署名入りの本には必ず相手の名前があり、本をもらった人が何故保存できずに、古書店に渡ったのか調べることができる。…’どの作家の署名入り本も、その散逸、流入のいきさつから、長くても短くてもよい物語を引き出せると私は信じている。細かく見ていくと重大な社会背景や時代の意義を含んでいるかもしれない。私は1954年4月に周作人が上海出版公司から出版した『魯迅の小説の中の人物』の初版本を所有している。扉の頁には筆で署名して、名前の印が押され、その上に‘行蔵先生お手元にお留めおき下さい 寿。’と書かれている。この本は章士釗先生に贈られたものである。その頃周作人は詩や文を書くのに、元の名を署名するのは良くないので、“遐寿” 或いは“長年”のペンネームを使用していた。二年前、私は偶然、周作人の日記の中に、彼が北京の張次溪にこの本を転送するよう頼んだことを見つけた。それではこの本がなぜ古書店に流入したか、今となっては調べようがない。しかし、この二人の当事者に関しては大いに語る価値がある。」北京女師大事件（1924）の頃、周作人と章士釗は対立していたからである。

かげやま たつや（教授・中国文学）